

### 小特集「大連シンポジウム2011」：口述史学による「満州国」留学生予備校への一考察

LIU, Zhensheng / 劉, 振生

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学

(巻 / Volume)

10

(開始ページ / Start Page)

105

(終了ページ / End Page)

121

(発行年 / Year)

2013-03-29

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00022452>

# 口述史学による「満州国」 留学生予備校への一考察

劉 振 生

## はじめに

「満州国」は近代日本が中国を侵略した時代的産物であり、現在中国東北方の遼寧省、吉林省、黒竜江省という三省の区域を指す。日本軍は中国の東北地方<sup>1)</sup>を14年間(1931-45)も占め、傀儡政権を維持するために、毎年多くの中国人留学生を派遣した。その後時局に応じて、1937年長春(当時の新京)に留学生予備校を設け、学生に一年間日本語を始めとする基礎教育を受けさせてから、日本留学の途につかせるということであった。「満州国」留学生予備校に関する調査と研究は「満州国」史と中国人日本留学史などの研究において、相当に意義と価値があると思う。これまでは、この方面の調査と研究はあまり進んでいない。本論文は、当時の教育と留学に関する、多くの資料を参考する傍ら、元留学生数十名にインタビューした上でまとめたものである。

## 1. 「満州国」留学生予備校成立の背景

1932年3月1日、日本関東軍に操られた、清の廢帝=溥儀を執政(後に皇帝と改称す)とする「満州国」が長春(後「新京」と改称す)に樹立された。「満州国」政府は傀儡政権をつなぎ持つために、毎年一定数の学生を選んで日本へ派遣した。これは文教部(教育管理機関)で留学選抜試験を實行され、年々と増えていた。

1936年9月、留学生認可制度が制定され、翌年2月その一部が改正された。当時派遣された学生の学習態度及び日常生活態度は漸次日本の植民地教育で

軟化されたことは事実である。留学生としては「満州国」政府に選ばれ、日本の有名学校に特別扱いをもって入学でき、かつ卒業は保証されており、日本留学中は元より将来までも身分保証の「恩恵」に浴することが出来るので、勉強しないわけであった。留学生が在籍する学校における日本人教員の所見によれば、「留学生認可制度施行以来、留学生の素質は漸次向上させるは喜ぶ所なるも、秀才的優秀者を見出し得ざるにあらざるや考へらる。蓋し従前の優秀者に比して素質劣れるにあらざるして、むしろその学習態度に於いて熱意のたからざるにあらざるやと察せらる点あり」<sup>2)</sup> というのが実情であった。

このことには二つの原因が考えられる。一つは留学生が亡国の恨みをのみ込んで勉強をしながらも、未来が漠然としている状態であったことである。もう一つは留学生の中に農民、一般の家庭出身の者は少なく、「満州国」の大臣や官吏や金持ち等が社会的地位、職の便宜を利用して子弟を留学させることが多かったことである。「当時偽満官僚の子弟が日本に留学したら、軍部の方は彼らに＜王蜂蜜＞を発給した。その目的は官僚の養成のためであった」<sup>3)</sup>。ところが、政府はこれに対して「更に奨学規程の効果発揮を強化する必要がある」と考え始め、新制度施行に伴い、日本の学校における学席を特設することは、留学生に対して、留学の目標を持たせる上にもまた希望を高めさせる上においても大きな効果が挙げられると見込んだ。そこで、「満州国」同学制における初等中学校（三年制）に対し、日本の高等学校に学席を設置したが、入学試験において資質充分ならずとして入学できなかつたことも事実であった。この局面に対して、留学生予備学校の設置が必要になると思われ、1937年（康德4年、以下略）3月頃、予備校の設置が話題に上った。そこで、「満州国」駐日大使館及び陸軍省方面と合議した上で、一年間の予備教育を必要とする主旨に基づき、予備校設置案を立て、1937年5月「満州国」政府に提出された。

1937年5月20日、「満州国」政府は文教部布告第1号をもって留学生予備校事務所を設置した。その後事業を始めるや否や、同年7月16日民生部布告第1号をもって「留学生予備校事務所廃止の件」を公布した直後、「満州国」留学生予備校を正式に長春に設立した。そして、翌年の康德5年3月10日に政府は「満州国」勅令第32号を公布し、「満州国」留学生予備校の官制を定めた。当の官制は皇帝の溥儀の署名、國務総理、民生部大臣の副署名で公布された。

官制では、留学生予備校は民生部大臣の管理に属し、外国の教育施設に留学しようとする者に対する必要の予備教育を施すことという性質、職員を置くこと、校長と教官の委任、修業時間、科目、入学資格など明確に説明してあった。〈満州国官吏録〉<sup>4)</sup>によれば、当校の校長と教師の姓名は次の通りである。



図1 広田常次郎

校長（薦） 広田 常次郎  
 教官（薦） 源 亮 横田 茂 弾 正簾  
                   福山 長敏 小畑 貞  
 属官（兼） 鈴木 茂樹（民生部属官）

また後の康德6年2月23日、政府は勅令第32号をもって〈留学生予備校官制中改正ノ件〉を公布し、教官と属官の薦任を委任に変え、官吏の任命権を強めたこと

が分かる。

康德5年6月24日、「満州国」政府は民生部令第70号をもって〈留学生予備校規程〉<sup>5)</sup>を公布した。当規程の第一條に「留学生予備校ニ入学セントスル者ハ思想堅実身体強健ニシテノ各号ニ該当スル満州国人タルコトヲ要ス」と書かれたように、予備校成立の目的と意義が明確にされている。応募条件の一つは国民高等学校又は女子国民高等学校程度以上の教育施設を卒業した者又は当該年度においてそれを卒業する見込のある者、もう一つは国民高等学校又は女子国民高等学校卒業程度の学力検定に合格した者である。留学生予備校の修業年限は1年とされ、毎年1月1日に始まり、12月31日に修業が完了することになる。修業科目は国民道徳、日本語、数学、英語、物理化学又は地理、歴史及び訓練である。また休日には元旦（旧暦1月1日）、万寿節（新暦2月6日）、紀元節（新暦2月21日）、建国記念日（新暦3月1日）、天長節（新暦4月29日）、訪日宣詔記念日（新暦5月2日）、明治節（新暦11月3日）入学日、卒業日及開校記念日があるが、日本、「満州国」樹立と直接関係するのは六つにも達した。またこの学校に入学しようとする学生は統一試験を受ける。入学試験は筆記試験、口頭試問及び身体検査に分かれる。筆記試験の科目は「一 国民道徳 二 国語（日本語及満語又は日本語及蒙古語の解釈作文）三 数学

(代数及幾何学) 四 前各号の外民生部大臣の認可を得て、校長の指定する科目]に分かれる。民生部大臣に指定された留学生認可試験、特に留学生予備校に入学しようとする者に対して、校長は規定に拘らず、その試験成績を見て入学を許す。また校長は所定課程を卒業した留学生予備校の学生に卒業証書を授ける。民生部大臣は留学生予備校の卒業者に留学認可証を発給する。学生は寄宿舎に入居し、給食制度が施される。学校に在籍するためにかかる費用は学費1円、授業費年額24円であったという。

## 2. 「満州国」留学生予備校各期生の募集と派遣の経緯

上記の公告によれば、「満州国」留学生予備校は1937年7月10日に新京北大街に仮校舎が設けられ、当時の教育司長の皆川豊治が校長を兼ねた。開校の当初において、教室はただの部屋に過ぎず、職員も専任教官として熊野逸馬一人がいるだけであった。民生部督学官又は編審官が時間講師として教官を務め、学生も随時試験を行って入学を許可され、学生数は一時135名に達したが、同年12月の卒業試験の受験者は97名で、正式に入学した者52名(内女子1名)が後に第一期の卒業生として学校を出た。

この第一期の学生は実際混乱の状態では修学したのである。元第一期の学生董連民の話によれば、「当時校舎も古くて狭いし、先生もあまり授業に来てくれないので、時々四方山話をして時間を潰した。またクラスには「満州国」総理大臣張景恵の息子が同級生で、背が高く余り勉強しないが、バレーボールをよくやっていた」<sup>6)</sup> という。また元第一期の学生王保粹の思い出によれば、「当時学生数は40-50名ぐらいあり、学ぶ科目は主に数学と日本語であった。我々は卒業試験を受けずに、留学認可試験を受けた。その後、進学の申請書に志望学校を記入し、多くの学生は国内にある学校を選んだので、日本へ行かなかった。私を入れて5-6人だけが日本留学の途に着いた」<sup>7)</sup> という。

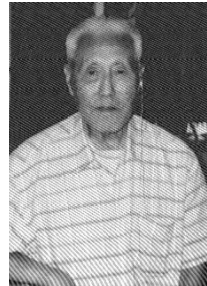


図2 董連民

第二期は1938年2月18日に入学式が行われ、当日登校した学生40名が一

組とされた。1937年秋に実行した留学生認可試験の不合格者及び内地高等専門学校の入試落第生も入学可能で、生徒数は70名に達し、文科、理科二組に分かれて授業が始まった。同年3月25日に皆川豊治の代わりに広田常次郎が校長に任命され、予備校は実質的に開校された。広田常次郎の話によれば、「同年12月11日に卒業試験終了と共に、冬の厳寒積雪の中を長春大街にある校舎（旧市公署遺跡）に移転した」<sup>8)</sup>という。実際この移転に関して、政府は「政府公報」に布告を發布した。原本は次の通りである。

民生部布告第一号<sup>9)</sup>

康德五年十二月十一日ヨリ留学生予備校ヲ左（下）記ノ通移転セリ

康德六年一月十日

民生部大臣 孫其昌

記

旧位置 新京特別市北大街

新位置 新京特別市長春大街

この北大街にある仮校舎は前と変わらず、運動場と言える程のものはなかったが、中庭には一部バレーコートには足りないが、運動できる場所があり、学生のバレーの練習場所となった。校長の広田常次郎の話によれば、「康德5年の端午の節句に張総理大臣公館運動場において新京の籠排球大会開催せられし時、本校排球チームも出場して、二回三回勝ち進み最後にオール新京チームと対抗戦之を撃退して名誉の優勝杯を張景恵閣下手ずから授けられる光栄に浴したのであった」<sup>10)</sup>という。また元二期生の史乃光の思い出によれば、「張景恵の息子張紹紀もこの試合に参加した。彼は本来第一期生であったが、最後の進学試験に合格できなくて、第二期生の我々と一緒に勉強していたわけである」<sup>11)</sup>という。その後、張紹紀は二期生として日本留学の途についた。

1938年8月1日、「満州国」政府は民生部大臣孫其昌の訓令第138号をもって各省長、新京特別市長に令し、〈康德6年度留学生認可試験施行並留学生予備学校募集及試験施行ニ関スル件〉を公布した。その詳細は次の通りである。

康德六年度ニ日本ノ学校（満州医科大学、旅順工科大学、南満州工業専門学校及大連高等商業学校ヲ含ム）ニ留学セントスル者並留学生予備校ニ入学セントスル者ニ対シ左（下）事項及別紙要領ニ依リ、留学生認可試験、留学生予備校学生募集及試験ヲ施行シ、十一月十三日迄本部ニ到達スル如ク試験答案関係書類及受験者名簿ヲ一括送付スベシ

康德五年八月一日

民生部

記

- 一 留学生認可試験及留学生予備校入学試験ノ筆記試験問題ハ本部ヨリ指示スルニ付極秘トシテ処理スベシ
- 二 口頭試問ハ教育関係科長並ニ視学官ヲシテ之ニ当ラシムベシ
- 三 身体検査ハ学校医又ハ公医ヲシテ之ニ当ラシムベシ
- 四 留学生認可試験施行並ニ留学生予備校学生募集及試験施行ニ関シ必要ナル費用ハ貴公署庁費中ヨリ支弁スベシ

1939年度留学生認可申請手続要領は留学生予備校の規程に倣って作成したものだと考えられる。例えば一の資格要件と二の申請手続は留学生予備校の規程と変わらない。ただし、関東州内に住所を有する「満州国」人は民生部教育司長、日本内地に在住する者は駐日満州国大使に提出する。このことから依然として関東州が「満州国」と違い、日本国土の一部として取り扱われていたことが分かる。認可方法には認可試験が行われる。ただし、留学生予備校を卒業した者は試験を免除される。認可試験は筆記試験、口頭試問及身体検査とされる。筆記試験は下の科目について行われた。

- (一) 国民道徳
- (二) 国語（解釈作文）
  - (イ) 日本語及満語
  - (ロ) 日本語及蒙古語（蒙古人ノミニ科ス）
- (三) 数学
- (四) 物理及化学（理科系統志願者ノミニ科ス）
- (五) 博物（理科系統志願者ノミニ科ス）

- (六) 英語 (文科系統志願者ノミニ 코스)  
 (七) 日本歴史 (文科系統志願者ノミニ 코스)

参考のために、1938 年大学専門学校入学試験問題を載せる。

#### 一、国民道徳科

- (一) 回鑿訓民詔書ニ仰セラレタル忠孝仁愛ニツイテ述ベヨ。  
 (二) 感恩奉仕ノ生活ニツイテ述ベヨ。  
 (三) 我ガ国ノ現状ニ鑑ミ留学生ノ使命ニツイテ述ベヨ。

#### 二、歴史科

- (一) 遣唐使ヲ述ベヨ。  
 (二) 日露戦争ニツイテ述ベヨ。  
 (三) 下ニツイテ述ベヨ。

1、神勅 2、古事記 3、皇大神宮 4、楠木正成 5、法隆寺

上の二つの試験内容から見れば、「満州国」の傀儡という性質と日本文化浸透の準備が十分に読み取れる。

留学生認可試験を受けようとする者は、受験手数料2円を納付する。康德5年の試験は11月1日、2日、3日の3日にわたって行われた。文科生の受験科目は次の通りである。

表1 留学生認可試験の科目と時間割<sup>12)</sup>

月日 \ 時間	午前9時10分－ 午前10時30分	午前10時40分－ 午前12時	午後1時－ 午後3時
11月1日	国民道徳	国語 (日本語)	数学
11月2日	国語 (満語又ハ蒙古語)		
11月3日	口頭試問及身体検査		

試験地は省、特別市公署の所在地、関東州、東京にあり、試験場は省、特別市公署において選定の上発表し、大体毎年12月中旬に合格者が発表された。



また留学生予備校の学費には授業料年額 24 円、入学金 1 円、寄宿舎費、食費、その他雑費月約 20 円とされ、これらの費用は全て学生の自弁とされた。1938 年の留学生認可試験の問題<sup>13)</sup>は次の通りで、留学生予備校入学試験にも適用された。

留学生認可試験（留学生予備校に適用）（八十分鐘）

一、次の語句に仮名をつけよ。（十点）

反古 ミイラ 印半纏 欲しいままに 眉間の皺 草を巻る 恙無く 畏れ多い  
訓へ

二、次の仮名に漢字をあてよ。（十点）

1、エンキョクにコトワる

2、彼はズノウメイセキでキンベンだったからヨウセツしなかったら大学者になっていただろう。

3、フトウへ駆けつけた時は船は既にガンベキを離れていた。

4、ダンナサマゴジウダンでしょう。こんな馬鹿らしいことはゴメンコウムリましよう。

三、次の語句及び文を平易なる日本語にて解釈せよ。（二十点）

1、依

2、濡れ手に粟

3、切羽詰まって是非に及ばず

4、日記は必ず其の日其の日するべし。一日おこたりでは次の日いよいよおこたりがちになるものなり。甚だしく疲れて筆もつことだにたえがたく思はば他日記憶を呼び起こすにたるべきかどうかどなりともしるしおくべし。

5、智に働けば角が立つ、情に棹させば流される、意地を通せば、窮屈だ。とかく人の世は住みにくい。住みにくさがかうじると、心やすい所へ引越したくなる。何処へ越しても住みにくいと覚った時、詩が生まれて画が出来る。

四、次の言葉を使って短文をつくれ。（二十点）

1、そうでもしなければ

2、藪から棒に

3、何はさて置き

4、心ゆくばかり

5、案外

五、次文中に誤りがあれば訂正せよ。(二十点)

- 1、峠から越えると向かうの方に広いの野原を見えました。
- 2、私は歯が痛んで何も食べられませんし、弟は足が痛くて歩けません。
- 3、さすがの豪傑も之を破ることが出来た。
- 4、たくさんの苗を植えたが、育つたのは数えるほどしかありませんでした。
- 5、ごめん下さい。新聞社ですが、新聞代を頂いて上りました。

六、文法。(十点)

- 1、次の文中より副詞を選び、それがどの語句を限定しているかを示せ。  
たまたま永らく会は無かった校友と出会って、お互いにその境遇変化に驚いた。
- 2、助動詞(られる)を用いて、左(下)の条件によって短文を作れ。  
可能 受け身 尊敬

七、次の満文を日文に翻訳せよ(十点)

- 1、你先别着急，赶明天自有个水落石出。
- 2、与其等父母死了，去杀猪宰羊的祭祀，还不如趁着父母活着的时候儿，不亏他们的口腹，依从他的心愿呢。

留学生認可英語試験(二時間)

1 Translate the following sentences into Manchoukuo language or Japanese:

- (1) Many authors wrote plays and exceedingly good ones, but the greatest of all these authors was Shsakespeare, becacse he knew better than any one else just how different cirumstances.
- (2) It is impossible to over-estimate the importance of training the young to virtuous habits. In them they are the easiest formed, and when for med they last for life.
- (3) education individuality hero vegetable engine permit try prosperous frank absolutely

2 Translate the following sentences into English:

- (1) 我们要给外国人说明满州国、我们对自已的国家、总得先有个正当的理解才行。
- (2) 在沿着河流的狭路上、向前走过四十五分钟左右、才看见一个闲静的村庄。觉得这

村庄的景況、和那周圍的自然形式、倒很能得其調和似的。

(3) 誓 忠実 愛国心 困難 服従 勇氣 義務 機会 徹底的 努力

3 (1) What are the Four Classes of Sentences and give an example of each in English:

(2) Give the Parts of Speech of each word in the following paragraph in English

Once the north wind and the sun had a quarrel.

"I am stronger than you," said the north wind.

"Oh, no!" said the sun, "I am much stronger than you" just then a traveler came along the road. He was wrapt in a warm cloak.

上記の日本語と英語の試験問題を見れば、まず中国語を満語と言い改めたことが注目される。そして日本語の試験問題は相当に難しく、何年間も日本語予備教育を受けなくては、とても答え得ないだろう。また英語試験問題の回答は満語あるいは日本語によると要求されるので、日本語使用の強調も分かる。中でも英語訳における「忠実」「服従」「誓」などの言葉を見れば、これも日本の植民地思想強化の一断面だと思われる。

1939年度も、学校は依然として長春大街の校舎にある三教室で、男子120名、女子24名を文科は一組、理科は成績の優劣により二組に分け、各自の実力に応じて指導する方法を取った。当時政府は予備校に経費を41,310円支給し、留学総費用の八分の一を占めた。しかし、条件はあまり改善されなかった。三期生の趙尚質の話によれば、「前校舎と同じく依然運動場がない。学生はその代わりに月一回の遠足をした。政府はこの第三期から学生の体質を強化する口実によって、憲兵訓練所の小貞部隊長を呼んで軍事教練も始めた」<sup>14)</sup>という。この年の秋留学生の認可試験が行われると同時に、次年度予備校の入学試験も行われた。試験地は新京、奉天、ハルビン及び東京の4ヶ所で、志願者は370名で、そのうち230名が合格者として発表された。このように1939年度には文科31名(内女子5名)、理科65名(内女子14名)、合計96名が第三期卒業生として留学の途についた。資料によれば、第三期卒業生の全員は次の通りである。

表2 留学生予備校第三期卒業生全員一覧<sup>15)</sup>

郝寿山	劉琴潤	王克良	孫大周	周憲弘	閻壮志	郭子森
楊德普	王和璧	韓樹忠	孫玉梁	劉中興	温憲中	王煥庭
賀良輔	張恒鐸	黃儒林	王樹權	柏嘉祥	戈啓堂	趙忠信
侯凡	徐萍	徐立操	邵先鐸	佟蔭棠	張啓国	謝宗輔
張德璋	衣家驛	王孝讓	包宜	郭德栩	孫培忠	鄭文秀
金阿綿	隋宗清	梅之秀	熙麟養	修良	趙尚質	王承周
王乃德	陳著仁	王文彦	王方忱	于世庠	張本同	李連荃
楊肇文	李德森	金連蘊	林春堯	楊丕忠	楊会祿	季苳臣
韓行篤	劉克治	張景柏	曹正熙	徐恒貴	納古迪	馬忠賢
李文光	崔其祥	董志堯	金長盛	金紹炎	孫從恕	于冲
趙仲三	武占元	喬魁学	范柏齡	賈世文	韓行懿	張淑蘭
裘馥茹	劉可棟	色仁多爾吉	牛庚辛	王友書	佟瑞芝	隋宗茂
于潤海	竇連馥	曾淑賢	傅毅	陳興華	宋英珍	金毓華
周鳳蘭	李蔭清	閻樹珉	孫貴春	王勿卿	金玉琴	姜書美

1940年2月26日、留学生予備校はまた吉林大路にある校舎に移転した。当校舎は西安橋優級学校跡を利用し、寄宿舎は第二国民高等学校の古くて壁が落ち軒も傾いていたものを修理して使用することとなった。広田常次郎は「今回は幸いにも広大なる運動場に恵まれ、その上裏手は大同公園（今の児童公園）に続き、空气清新夏季の生活には申し分無きも防寒設備不完全なる建物で、冬季は寒風肌を裂き宿舎の水道は時に氷結して用を為さず困難を感じるが多かった。でも職員生徒皆たゆむことなく学業に励み、また身体の鍛練にも意を注ぎ、毎朝授業前の建国体操又は1000メートルの駆け足は厳寒中も欠くこと無かった」<sup>16)</sup>と記した。在学者数は、各大学に入学する者を除いて170名になり、「文科一組、理科二組、今回から男女に分けられ、女子学生の管理者は日本人の樋口という女史であった」<sup>17)</sup>と、四期生黄克顕は語った。

1940年8月30日、留学生予備校は第五期目の学生募集を行い、人員を約250名（文科：男子65名、女子10名；理科：男子150名、女子25名）募集

する予定で、年齢は24歳（1940年12月31日）以下とされた。

ところで、この年において注意すべきことは、従来国民高等学校の卒業生の優秀者には留学認可試験を受ける資格があり、合格すれば直ぐに日本の専門学校に入学できたが、康德7年より認可試験の受験資格を在満教務部関係の日系中等学校卒業生及び四学年修了者と旧学制高等学校卒業生に限定し、新学制による国民高等学校の卒業生は必ず予備校を卒業した上でなくては留学を許可せぬことに改め、更に受験者は出身学校校長及省長の推薦を得てからすべきものと改定したことで、これにより、予備校存在の意義を強めたことが分かる。

この新制度により、予備校の志願者数は965名にも及んだ。学校では先ず書類選考を通じて500名を選んだ。これを第二次試験の受験者と決め、同年11月16-18日の3日間、新京、奉天、ハルピン、安東、延吉、旅順、東京において試験を行い、200名を合格者とした。その一部は「満州国」内の大学に入学し、結果は受験者を163名予備校に入学させることとなった。

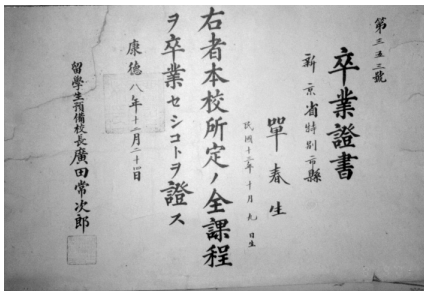


図3 単春生所蔵の卒業証書

この年は、前年に引き続き吉林大路の仮校舎において、康德8年2月15日に入学式が行われた。今度は初めて女子のみ特別学級を設け、理科23名、文科5名を併せて一学級とし、男子は文科一学級、理科一学級に編成された。そして今回も軍事訓練を設け、教官は関原と言ひ、教官室もあり、それは

後に兵器庫とされた。康德8年12月24日に予備校では第五期卒業式が行われ、卒業生は132名（内女子26名）で、翌年の康德9年1月24日、新京を出発して日本留学の途についた。「引率官は高石といい、長春に集まって出発したものだ」<sup>18)</sup>と、五期生の単純（単春生）が語った。

康德8年11月20日、翌年の第六期生の入学試験が行われた。この年度より「満州国」内の各大学専門学校共通試験が同日に行われたため、受験者数は去年より減り、志望者は540名、その中から合格者が190名（男子152、女子38）と決定された。学生は1年間の勉強を経て、翌年康德10年1月、新京から集団

で日本留学の途についた。六期生の呉新の話によれば、「男女はそれぞれに授業を受け、お互いに名前も知らなかった」<sup>19)</sup>という。翌年康德9年12月、第七期学生の募集が行われ、結果は理科男子78名、理科女子26名；文科男子42名、文科女子9名であった。新京と奉天との受験地の合格者の詳細は次の通りである。



図4 留学生予備校第五期学生卒業記念

表3 留学生予備校第七期入学者一覧<sup>20)</sup>

理科男子（新京受験地）

番号	姓名	番号	姓名	番号	姓名
3	孫盛豪	5	趙雲起	9	阿棋拉勒因
10	王徳良	11	巖富源	13	張景廉
16	王宗藩	17	初学儉	18	姜景太
19	立川尚弘	21	三義臣成	23	劉慎修
39	孫福廷	49	劉元波	50	蘇勃然
51	林炳烈	54	劉長青	55	岩本宇平
56	伊明岐	57	王文林	61	李百春
63	張曾喜	64	張景岳	65	孫世荃
67	呂志乾	69	陳一同	71	邵興發
72	韓明昇	73	劉德智	75	池爽武
76	李明旭	82	李德禎	84	高緒彦
85	車仁沢	121	徐明時	122	王宗庸
123	王果夫				

（奉天受験地）

3	許天閣	6	林基学	7	武克礼
9	靳天宗	10	王紹卿	11	范延生
13	于全恭	16	金成文	17	劉俊哲
18	楊家琳	19	蘇立猷	22	張世紀
23	徐万茹	24	王樹本	26	高春台
28	王永	32	劉惠臣	34	王廷俊
36	申玉璋	40	王学蕴	41	賈学堯
42	蔣春林	43	李永吉	44	劉維悅
45	張喜文	46	于純智	47	齊繁

48	関文竜	49	馮喜楨	50	李融和
54	谷茂翠	59	程雲竜	60	温以忠
61	趙天民	62	孫耀廷	65	于宏毅
66	王永昌	67	佟以林	71	王維周
72	張永生	96	馮玉成		

## 理科女子（新京受験地）

86	孟淑貞	90	金東純	91	周鳳瑞
93	額布結	95	関佩倫	98	王鏡秋
99	王桂铮	100	王淑静	103	邹元楷
105	付家瑞	106	唐漱石	107	劉士儀
108	金毓静	109	王桂芬	111	佟瑜璋
119	崔鳳熙		劉貞静		

## （奉天受験地）

79	丁慎言	80	李秀蔡	81	賀俊傑
84	陳有仲	85	金適学	86	金適文
89	韓蕴琴	91	孫玉珊	94	杜名藍

## 文科男子（新京受験地）

3	張忠傑	4	金德岷	5	嘎尔雅因
6	萨義爾	7	萨西雅札布	8	孫盛武
9	乔伝謀	12	長山宏	13	大沼武雄
14	新井承楽	16	敖力布	17	韓学信
18	王麟章	20	陳国忠	25	馬家駒
28	李長信	29	張燾基	31	李铮荣

## （奉天受験地）

2	孫徳成	5	邵光朴	8	黄立国
9	熊宝良	10	王毓忠	12	張礎基
13	王桐義	15	陳蔭堤	16	薛来運
17	索宝昌	18	李樹森	19	姜広慶
20	李徳純	23	李烈權	24	許英林
25	李国钧	26	袁国恕	28	孫作人
29	王君高	31	白鉄雄	32	于潤江
33	付元瑞				

## 文科女子（新京受験地）

34	許広沢	35	萨仁格日樂	36	萨荣高瓦
38	宋会芳	39	馬春榮	43	孫連珠

## （奉天受験地）

36	王栄光	37	葛慕宇	38	史延芳
----	-----	----	-----	----	-----

この第七期の学生は前半期には長春で修業をしていたが、後半期（1943年7月以降）は遼寧省の瀋陽（奉天市北関区大北街、現在の瀋陽市第五中学）で送った。予備校がなぜ他の省に移ったのか、詳しいことは分からないが、七期生の孫利人は、「当時太平洋戦争が勃発して、長春は首都なので、学生の安全を考えてそうしたのかも知れない」と語り、また「当時予備校の隣は関東軍の武器庫とされ、安全のために我々が追い払われて、瀋陽に移転したのだ」<sup>21)</sup> という説もあった。



図5 瀋陽にある留学生予備校跡

康德10年度には翌年の第八期学生の募集がされた。この期の学生数は文科29（男子24、女子5）名、理科72（男子58、女子14）名、合計101名で、理科は二学級に分けられた<sup>22)</sup>。また、康德10年12月には、翌年の日本留学生の認可試験が行われ、『政府公報』にその合格者が発表された。

最終回の第九期の学生募集もされたが、その後暫くして日本の敗戦を迎えたので、学生は日本へ行かず、留学生予備校も完全に閉校された。

前述のように、康德4年10月第一回留学生認可試験が実行されて以来、数多くの学生がそれを経て日本へ留学に行った。留学生予備校学生の一部（例えば孫大寿、李徳純ら）はその試験を受けた。予備校は留学生認可試験と並行して、ある程度「満州国」の日本留学を推し進めたのである。

## おわりに

「満州国」留学生予備校が日本植民地時代に生まれた特別な教育施設である。当の学校から日本留学の途についた東北人の学生は1000名を越えた。これらの留学生の大部分は修学が終わったら日本から東北地方に帰り、「満州国」政府の機関に就職したが、自らを中国人だと思い込んでいたし、日本人とある程度抗争していた。また日本の敗戦後になってから、とりわけ改革開放以来、



活躍が始まり、日本語をもって社会に力を尽くした。彼らの愛国心も後の語りから、業績まで十分に感じられるし、見逃してはならないと思う。

留学生予備校の卒業生を始めとする「満州国」時代における元日本留学生は特別な時代（日本占領下）に日本へ派遣されたのである。彼等は特別な時代に生まれ、特別な時代に小・中学校の教育を受け、また特別な時代に日本留学生生活を送り、特別な時代における日本人と日本社会に触れたので、日本に対して特別且つ深刻な認識を持ったわけである。この認識は他の時代には無く、近代中国人日本認識への補充の一部となるだけでなく、大変に重要な歴史的価値と現実的意義があると考えられる。

#### 注

- 1) 当時大連を中心とする遼東半島は既に1895年日清戦争で日本の植民地に割譲され、日本に関東州と改称されたので、「満州国」に所属していなかった。
- 2) 謝廷秀『満州国学生日本留学十周年沿革史』満州国大使館内学生会中央事務所、康德9年9月10日印刷、9月15日発行、156頁。
- 3) 鐘少華『早期留日者の日本談』山東画報出版社、1996年、106頁。
- 4) 国务院総務庁人事処編纂、康德社、康德7年12月1日発行、71頁。
- 5) 武強『東北沦陥14年教育史料』第2輯、吉林教育出版社1989年1月、115頁。
- 6) 筆者は2001年8月6日、董連民の自宅でインタビューを行った。
- 7) 筆者は2002年8月15日、長春にある社会主義学院で王保粹にインタビューを行った。
- 8) 『満州国学生日本留学十周年沿革史』、47頁。
- 9) 『政府公報』第1425号 康德6年1月10日星期二（火曜日）、271頁。
- 10) 謝廷秀『満州国学生日本留学十周年沿革史』、48頁。
- 11) 筆者は2001年9月17日、天津で史乃光にインタビューを行った。
- 12) 福士匡 岩沢巖『満州国 大学専門学校入学試験問題・解説』、東方印書館、康德6年、258頁。
- 13) 『満州国 大学専門学校入学試験問題・解説』、1～13頁、169頁。
- 14) 筆者は2001年6月16日、趙尚質の自宅でインタビューを行った。
- 15) 本表は三回生王煥庭が保存した原本を整理したもので、98人が掲載されている。
- 16) 『満州国学生日本留学十周年沿革史』、48頁。
- 17) 筆者は2002年6月28日、黄克顕の自宅でインタビューを行った。
- 18) 筆者は2001年9月18日、天津で単春生にインタビューを行った。
- 19) 呉新は留学生予備校卒業生のことを紹介してくれた最初の人物で、筆者は2001年3月に自宅でインタビューを行った。
- 20) 『政府公報』第258号、康德9年12月26日星期天（土曜日）、507頁。
- 21) 筆者は2002年9月長春にある社会主義学院のホテルで孫利人を始めとする留学生予備校卒業生の数人にインタビューを行った。
- 22) 『政府公報』2871号、康德10年12月27日星期一（月曜日）。

<ABSTRACT>

## **Essay on the Preparatory School for Overseas Students in “Manchukuo”: With a Method of Oral History**

Zhensheng LIU

“Manchukuo” was a product of an invasion by Japan to China. Conducting research on preparatory school for overseas students in “Manchukuo” should be a meaningful to a history of “Manchukuo” and Chinese students in Japan. This article is a result of materials about actual conditions of the education system and overseas education in “Manchukuo” at the time as well as interviews with former overseas students.

The preparatory school for overseas students in “Manchukuo” is the educational facility in the Japanese colonial period. Most students who had studied in Japan became a staff of governmental organizations of “Manchukuo”. However they recognized themselves as a citizen of China not “Manchukuo” and partly rested Japanese militarism. Added to this, they have contributed to society with their skill of Japanese after Japan’s defeat, especially after policy of reform and of opening doors.

The graduates of the preparatory school for overseas students in “Manchukuo” sent forth Japan in an extraordinary period, therefore they became to have a serious-minded recognition. This recognition will complement recognition of Chinese people in the modern age.